北九州市立則松中学校

【学校ホームページアドレス】
www.kita9.ed.jp/norimatsu-j

ジャガイモ

校長通信　No.２５６

令和５年　５月９日

「 人生一冊を探す旅②～子ども読書の日取組編～ 」

校長　江　口　　満

【前号からの続き】６０数年間生きてきた私だが、一年間という時間を、ほんの６０数回経験しただけに過ぎない。「たくさんの小説を読めばたくさんの人生を経験できる。そうすれば人の気持ちもわかるようになり、優しくなれる。」本の価値を語る國枝先生の言葉一つ一つに、私は、命というものを考えさせてくれる。

私の読書活動とは、「人生一冊」を探す旅である。親友から「満にとっての人生一冊とは？」と聞かれ、当時、明確な回答が出来なかった高校時代。その親友は、「自分の人生一冊は、夏目漱石の『心』と倉田百三の『出家とその弟子』だ。」と言い切った。その時、彼の示す本の題名すら知らなかった自分。自分の「人生一冊」とは…。

4月17日（月）一学期最初の図書委員会の様子。図書委員長より年間目標「生徒が朝読をしやすい環境を作り、生徒の朝読を手助けしよう」のもと、①放課後の図書館の開閉②学級文庫の管理③朝読活動などの仕事内容を説明する3年図書委員長

【上】学校図書館職員伊勢田先生が「身近に本、気軽に読書」を合言葉に制作された皆さんが本に親しむことのできる掲示コーナー
【下・右】本年度着任された先生方の「人生五冊」を紹介②

実を言えば、私は、子どもの頃、あまり読書が好きではなかった。家でじっとしていることが耐えられず、外へ飛び出しては山や田圃（たんぼ）で遊び回っていた。小学校時代に思い出す本と言えば、ジュール・ヴェルヌ作「十五少年漂流記」ぐらいだ。いざ読書をしても、「もう５０ページも読んだ」「まだあと１００ページもある」などと本の下の部分に書かれているページ数ばかり気になった。読書をあまりしないので、小学校時代、母に音読をよくやらさせられた。洋裁（ようさい）をしていた母の横に座り、国語の教科書を声を出して読む。「そこ、違うでしょ」と何も見ていない母が、何で分かるのだろうといつも不思議だった。

中学校時代にいたっては、恥ずかしながら、本を読んだ記憶がほとんどない。「部活動でいつもサッカーボールを追いかけていたから、暇がなかった」と、言い訳をすることにしている。

私の読書の記憶は、高校時代からだ。期末考査が終わった日、本屋に立ち寄った。赤い背表紙の文庫が眼にとまった。１冊だけなら気にならなかったかもしれないが、同じ色の背表紙が十数冊並んでいたのでめだったのだ。その中の比較的薄い本を手に取った。（裏面へ）

Ｋ先生の「人生五冊」

①　おこだてませんように　（くすのきしげのり）
②　りんごかもしれない　（ヨシタケシンスケ）
③　ちはやふる　（末次由紀）
④　君たちはどう生きるか　（吉野源三郎）
⑤　52ヘルツのクジラたち　（町田そのこ）

【コメント】
①初読で号泣してしまった絵本。読み聞かせで読む時は、気を引きしめて読んでました。
②私の中の絵本の概念を変えた本です。この著者の絵本は、大人が楽しめます。
③漫画ですが、たくさん突き刺さるフレーズが出てくる素敵な本です。50巻で完結しました。
④小、中学生に読んでほしい一冊です。
⑤今、一番読みたい小説です。

Ｋ先生の「人生五冊」

①　鯉　（井伏鱒二）
②　手紙　（東野圭吾）
③　リーガルハイ　（古沢良太）
④　ぼくは明日、昨日のきみとデートする　（七月隆文）
⑤　ビブリア古書堂の事件手帖　（三上延）

【コメント】
①この話は、大学の講義で初めて知りました。タイトルの通り鯉が登場しますが、この鯉とは実は何だったのか。知ると内容が一変して見れます。
②「読めば分かる！」一作です。
③小説とは思えないくらい面白く、法律も一緒に学ぶことができます。ドラマになっていてオススメです。
④本を読んで始めて泣いた作品です。ＳＦ作品の良さをここぞとばかりに詰め込んだ一作です。
⑤本を読むことが苦手な人にもオススメです。この本を読むとますます本が読みたくなること間違いなしです。

本の作者は北九州の小倉出身だということを、以前、父が話していたことを思い出し、購入した。午後、試験が終わって特にすることもなかったので、家に帰り、表紙を開いた。東京駅の空白の４分間。なじみのある福岡県の香椎（かしい）という地名も出てきた。この小説に引きずり込まれた。夕食もそこそこに続きを一気に読んだ。読み終わったのは、明け方近くだった。翌朝、睡眠不足で眠いはずなのに、私の気持ちは高ぶっていた。松本清張（せいちょう）の「点と線」との出会いだった。

それからというもの、定期考査後の自分自身へのご褒美（ほうび）に松本清張の文庫を購入した。自分の本棚に、赤い背表紙が並んでいくことも心地よかった。松本清張の社会派推理小説を代表する作品、「砂の器」。この本を読んだ後の衝撃（しょうげき）を、今でも忘れられない。

大学への進学が決まった。下宿先に送るダンボール箱の中へ、松本清張の本を一番に入れた。大学時代には様々な作家の本を読んだ。毎日のように本を読んだ。しかし、テストやサッカー部の合宿などで何週間も本を読まないと、活字から離れても平気になってしまう。やはり、読書は習慣なのだろう。そのような時、まず松本清張の本を手に取った。そうするとスムーズに他の作家の作品に進んでいくことができた。松本清張の本は、いつも読書への意欲づけをしてくれた。**【次号に続く】**

「後輩から尊敬される先輩に」
２年１組　Ａさん

一年生から進級して二年生になり、私達には後輩ができました。私達はその後輩たちの先輩としてお手本にならなければいけません。なので私は、普段の学校生活で一年生が困っていたら、積極的に助けたいと思います。

私は放送部に入っていて、もうすぐ一年生が入ってきます。私が一年生のとき、部活に入ったばかりで分からないことが多くて困っていました。そのとき、二年生や三年生の先輩方が助けてくれたり、教えてくれたりしました。次は私達が助けたり教えたりする番です。私は先輩方がしくてださったように、一年生の役に立てたらいいなと思います。そして、先輩方のように私も一年生に尊敬される先輩になりたいです。一年生には最初、気を使わせてしまうかもしれません。しかし、私も最初のころ、初めて会ったばかりの先輩に話しかけるだけでも精一杯でした。だから一学期は一年生との距離をできるだけ縮めて、二学期になったら放送室に入るようになる一年生に、先輩として分からないことをいっぱい教えて、一年生の役に立てたらなと思います。

「二年生を完走するために」　２年２組　Ｎさん

僕は、よく二年生は一番だれる時期と聞いたことがあります。そのだれる時期こそ、一日一日を楽しく充実させたいと思っています。その中で大切にしたいことが二つあります。

まず、「一日必ず一つ頑張ったこと」を作ります。例えば、部活で頑張ったこと、授業で努力したことなどを作って一日を過ごしたいです。頑張ったことがない日は、反省することなどで常に何か一つ見つけるよう頑張ります。

次に「一歩前に」という言葉を達成することです。僕は人前で話したり、クラスの中で意見を発表したりするときに不安になって、自信が持てなくなります。その時には自分の殻を破って、「一歩前に」動いて、二年生、先輩として有意義に過ごしたいです。

クラスも変わり、初めて話す人もいます。一日でも早くクラスに溶け込んで、体育祭やクラスマッチで一位を取りたいと思っています。この二つのことを意識して二年生を完走し、自分としても、クラスとしても成長できる一年にしたいです。

「新しい世界」　２年２組　Ｍさん

私は、その日めずらしく自分の力で朝起きました。春休みが終わった最初の一日。正直クラスが変わり、進級することに対して期待より不安が大きくて、知らない人と関わることが少し怖くて、それでも新しい２年２組という環境の中、話が合う友達が出来たことにとても安心しています。

２組には絵を描くことが上手で好きという人が多くて、美術部員として少し負けるわけにはいかないなという気持ちになりました。

二年生になることで変わっていく生活や、日々の中で自分のしたいことを見つけて、目標や進路について深く考える。そんな一年になるのではないかと思います。だからこそ、今年は自分自身の意見や主張を口に出して伝え、それを達成するには何が必要で何をすべきか、どんな行動をしないといけないのかを自分で考えて、自分から何か一つでも出来そうなことをやってみたいなと思います。初心に戻って一から、二年生としての新しい世界を楽しめるよう頑張っていきたいです。

4月21日（金）4年ぶりに開催できた授業参観。2年1組「数学」、2年2組「英語」の授業の様子